中国古典文学大系 56

記録文学集

松枝茂夫 編

平凡社

訳者紹介

松枝茂夫（まつえだしげお）　1905年佐賀県生。東京大学文学部卒。早稲田大学教授。専攻　中国文学。主要訳著書　『周作人随筆集』（改造社）『紅楼夢』（岩波書店）曹禺『日の出』（平凡社）『中国笑話選』（平凡社）

飯倉照平（いいくらしょうへい）　1934年千葉県生。東京都立大学人文学部卒。東京都立大学人文学部助教授。専攻　中国文学。主要訳著書　『中国少数民族文学集』（平凡社）

村松一弥（むらまつかずや）　1926年東京生。東京都立大学大学院卒。東京都立大学人文学部教授。専攻　中国文学。主要訳著書　『中国少数民族文学集』（平凡社）『中国の音楽』（勁草書房）『清俗紀聞』（平凡社）

小川環樹（おがわたまき）　1910年京都生。京都大学文学部卒。京都大学名誉教授。専攻　中国文学。主要訳著書　『唐詩概説』（岩波書店）『中国古典詩集』（筑摩書房）『中国小説史の研究』（岩波書店）

岩城秀夫（いわきひでお）　1923年京都生。京都大学文学部卒。山口大学人文学部教授。専攻　中国文学。主要訳著書　『桃花扇』（平凡社）『中国戯曲演劇研究』（創文社）『板橋雑記・蘇州画舫録』（平凡社）

立間祥介（たつましょうすけ）　1928年東京生。善隣外事専門学校卒。専攻　中国文学。慶応義塾大学教授。主要訳著書　『従文自伝』（河出書房）『野火と春風は古城に闘う』（平凡社）『呼蘭河の物語』（平凡社）『三国志演義』（平凡社）

大滝一雄（おおたきかずお）　1918年新潟県生。東京大学文学部卒。独協大学教授。専攻　中国哲学。主要訳著書　『論衡』（平凡社・「東洋文庫」）

中国古典文学大系　全60巻

記録文学集　第56巻

1969年3月10日　初版第1刷発行
1984年12月15日　初版第10刷発行

訳者代表　松枝茂夫

東京都千代田区三番町5番地
発行者　下中邦彦

発行所　郵便番号　102
東京都千代田区三番町5番地
振替・東京8-29639
株式会社　平凡社

不良本のお取換えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担します）。
定価は外箱に表示してあります。

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社　石津製本所

© 株式会社　平凡社　1969　Printed in Japan

目　次

西京雑記

(晉) 葛洪著
飯倉照平訳

王昭君……三
五侯鯖……三
司馬相如……四
新豊……四
秋胡……五

東坡志林

(宋) 蘇軾著
松枝茂夫訳

承天寺の夜遊……六
沙湖に遊ぶ……六
廬山に遊ぶ……七
松風亭に遊ぶ……八
儋耳の夜……八
王子立を憶う……九
黎檬子……九
町家の子供と三国志のはなし……一〇
欲を去ることのむずかしさ……一〇
子瞻、赤目を患う……一〇
貧書生と飯……一一
六一居士の語……一一
道人の戯語……一二
欧公と語った言葉……一二
貧書生と銭……一三
劉凝之と沈士麟……一三
徐陵……一三
鳥と人……一四
金と土の価……一四
万花会……一五
書物の校訂……一五
馬正卿……一六
王安石の穿鑿ずき……一六
酒気……一七
青い空、白い月……一七
張僧繇の絵……一七
荔枝……一七

東京夢華録

(南宋) 孟元老著
村松一弥訳

御街……一八
東角楼付近の街巷……一八
酒楼……二一
飲み物・食べ物・果物……二二

運送車輛……二五
民俗……二七
婚礼……二七
正月……三〇
元宵……三一
清明節……三三
主上、宝津楼に登られ、諸軍、百戯を御観に供す……三五
還幸……三八
四月八日……三九
端午……三九
七夕……四〇
中秋……四一
重陽……四二
冬至……四三
十二月……四五

夢渓筆談

（北宋）沈括著
村松一弥訳

中国の衣冠は胡服……四六
学士の閣子……四七
鉛黄……四七
凹面鏡……四七
芸香……四八
やせた韓退之……四九
挙人はラクダなみ……四九
酒仙石曼卿……五〇
夫婦のきずな……五〇
鶴のたより……五一
赫連の城……五二
劉晏式米価対策……五三
范仲淹の饑饉対策……五三
河工の高超……五四
銭塘江の築堤……五五
塩価安定法……五六
曹瑋の戦法……五六
王元沢の機転……五七
濠州武芸談……五七
地図……五八
名将とは……五八
蓼花吟……五九
築城の奇策……六〇
銀鼓と宝刀……六一
集句詩……六二
正午の牡丹……六二
遠近法……六三
活版の始まり……六三
隕石……六四
虹……六五
紫姑神……六五
占い商売のコツ……六六
雅言の罪……六七
陝北の石油……六七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

蜜漬けと油いため……六八
船旅の心得……六八
カニ無き里の鬼……六九
どっこい生きている……六九

呉船録

（南宋）范成大著
小川環樹訳

巻上……七一
巻下……八八

老学庵筆記

（南宋）陸游著
松枝茂夫訳

香毬……一〇六
王安石……一〇六
聞人茂徳のこと……一〇六
張晋彦……一〇七
人の命……一〇七
四字足りない……一〇七
杜甫の草堂……一〇八
上官道人……一〇八
蘇東坡とウドン……一〇八
任子淵……一〇九
銭王の悪発殿……一〇九
不了事漢……一〇九
李和の炒栗……一一〇
参寥子の詩……一一〇
凡俗の仙人……一一〇
黄金の釵……一一一
漢子……一一一
故園の月……一一一
黄山谷の日記……一一二
宜州における黄山谷……一一二
僧行持……一一三
杜起莘……一一三
劉随州の詩……一一三
東坡の塡詞……一一三
京師の溝渠……一一四
艶蛾・素蛾……一一四
一生人……一一四
「山色・有無の中」……一一五
李白の詩……一一五
中国の砂糖……一一六
杜詩の出典……一一六
蘇文に熟すれば……一一七
老人を扶ける……一一七
無題の詩……一一七
浣花遨頭……一一八
白席……一一八
士大夫の家法……一一八
楊戩は蝦蟇か……一一九
李廌……一一九

輟耕録

（元）陶宗儀著
松枝茂夫訳

人肉を食う……一二〇
纏足……一二一
鎖陽……一二二
杭州人の遭難……一二三
靴鞋……一二三
禽戯……一二三
西域の奇術……一二四
金蓮盃……一二四
酔鉢児……一二四

甲行日注

（明）葉紹袁著
松枝茂夫訳

一二七

陶庵夢憶

付・瑯嬛文集

（明）張岱著
松枝茂夫訳

自序……一四四
鐘山……一四五
報恩塔……一四七
天台山の牡丹……一四七
金乳生の草花……一四七
日湖と月湖……一四八
金山寺の夜芝居……一四九
筠芝亭……一四九
葑門の荷花宕……一五〇
紹興の墓参り風俗……一五一
奔雲石……一五一
蘇州の名工……一五二
濮仲謙の彫刻……一五二
孔子廟の檜……一五三
孔林……一五三
魯王府の花火……一五四
朱雲崍の女戯……一五五
紹興の琴の流派……一五六
焦山……一五六
砂の壺と錫の銚子……一五七
沈梅岡……一五七
崎嶇山房……一五八
三代の蔵書……一五八
閔老人の茶……一五九
湖心亭の雪見……一六〇
陳章侯……一六一
不繫園……一六二
秦淮河の河房……一六三
二十四橋の風月……一六四
祁止祥の癖……一六五
いろいろの職人……一六六
姚簡叔の画……一六六

香爐峰の月……一六七
湘湖……一六八
柳敬亭の説書……一六八
金山の競渡……一六九
揚州の瘦馬……一六九
彭天錫の芝居……一七〇
西湖の香市……一七一
鹿苑寺の方柿……一七二
西湖の七月十五夜……一七三
及時雨……一七四
竜山の雪……一七五
龐公池……一七五
閨の中秋……一七六
王月生……一七六
張東谷の酒好き……一七七
阮円海の演劇……一七八
瑯嬛福地……一七八
祁世培……一七九

瑯嬛文集

五異人伝……一八〇
自作墓誌銘……一九一
徐青藤の小品画……一九四

揚州十日記

(明) 王秀楚著
松枝茂夫訳

一九五

板橋雑記

(清) 余懐著
岩城秀夫訳

序……二〇〇
上巻　雅遊……二〇一
金陵……二〇一
旧院……二〇一
教坊司……二〇二
妓館……二〇二
長板橋……二〇二
提灯船……二〇三
梨園……二〇三
花売り……二〇三
廓の好み……二〇四
身請け……二〇四
旧院の遊興……二〇四
李泰の詩……二〇五
金陵雑題……二〇五
王阮亭の秦淮雑詩……二〇六
中巻　麗品……二〇七
尹春……二〇七
李十娘……二〇八
葛嫩……二〇九
李大娘……二一〇
顧媚……二一一
董白……二一二

卞賽……二二四
卞敏……二二五
范珏……二二五
頓文……二二五
沙才……二二六
馬嬌……二二六
顧喜……二二七
米小大……二二七
王小大……二二七
張元……二二八
劉元……二二八
崔科……二二八
董年……二二八
李香……二二九
珠市の名妓（付）……二二九
王月……二二九
王節……二三〇
寇湄……二三〇
下巻　逸事……二三二
哀歓……二三二
蕭伯梁……二三二
姚壮若と沈雨若……二三二
遊芸……二三三
張卯……二三三
張魁……二三三
盟約……二三四
徐青君……二三四
松風閣の社集……二三五
扮装……二三六
鄭公履……二三六
柳敬亭……二三六
姜如須……二三六
陳則梁……二三七
憶江南……二三七
沈江憲……二三七
李三娘……二三八
李貞麗と香君……二三八
青楼篇……二三九
宋蕙湘……二三九
燕順……二四〇
趙雪華……二四〇
盒子会……二四一

獄中雑記

（清）方苞著
松枝茂夫訳

二四七

附記……二五一

老父雲遊始末

（清）陸莘行著
立間祥介訳

二五三

跋……二六一

曬書堂筆録

（清）郝懿行著
松枝茂夫訳

模糊……二六三
山水を知らず……二六四
借金……二六五
本色……二六六
下手の字の判読……二六九
宛字と俗字……二六九
草書……二七一
栄達を望む心……二七一
潤筆……二七二
癡趣さまざま……二七四
政治を養生法に譬えて……二七八
真本領……二七九
跛跛挈挈……二八〇
亡くした本　失った硯……二八二
廁で本を読むこと……二八三
趙子昂の家計簿……二八四
刑天……二八四
のんびりした話……二八五
命数について……二九〇
真率……二九〇
京師の官舎に鼠の多いこと……二九二
同じく蝎の多いこと……二九五
甘栗……二九五
梅漿……二九四
芑……二九五
諸葛菜……二九六
炒麺……二九六
長生果……二九七
芽韮……二九八
酒を譏った詩……二九九
蚕の山上り……三〇〇
足の裏の黒子……三〇一
沈黙は金……三〇二
人のけちをつけるな……三〇三
文章の論評について……三〇五
著述家須知……三〇五
詩句の剽竊……三〇六
詩の暗合……三一〇
秀句……三一〇
蘇東坡と廬山の詩……三一五
文章は簡なるを貴ぶこと……三一七
賄賂について……三一九
世態人情について……三二一
僮僕の新敬……三二二
名を盗む……三二三
禁物の言葉……三二四
人の幸不幸……三二六
あまりに非人間的な王安石……三二七
人をこき使ってはならぬ……三二八

三つの事に勤めよ……三九
古人の三反……三〇
後輩が先輩を軽侮した例……三一
奢侈の風俗……三三
寿命について……三四
弟への手紙……三五

浮生六記

(清)沈復著
松枝茂夫訳

題詞(管貽萼)……三七
題詞(潘近僧)……三八
序(楊引伝)……三〇
巻一 閨房記楽……三一
巻二 閒情記趣……三七
巻三 坎坷記愁……三五
巻四 浪游記快……八一

癸巳類稿

(清)兪正燮著
大滝一雄訳

〝節婦〟について……四〇四
〝貞女〟について……四〇八
やきもちは女の悪徳にあらず……四〇七

癸巳存稿

(清)兪正燮著
大滝一雄訳

妻について……四一
〝先生〟の意味について……四一
追い出された亭主……四一七
うつけ儒者のひがごと……四一八
〝幽玄〟についてのひがごと……四二
女ぎらい……四三

思痛記

(清)李圭著
松枝茂夫訳

序(黄思永の)……四三五
序(高鼎の)……四三六
巻上……四三八
巻下……四四〇
跋……四四八
解説……四六九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

記録文学集

松枝茂夫編

西京雑記

（伝）晉　葛洪著
飯倉照平訳

王昭君

（漢の）元帝は、後宮がおおぜいいたので、顔を合わせるのもなみたいていではできなかった。そこで、画工に肖像を書かせ、それをたよりにして召し出した。宮女たちは、こぞって画工に賄賂を使った。多いとなると十万両、少なくても五万両を下ることはなかった。ただ、王嬙（王昭君）だけは、そのようなことをあえてしなかったので、ついに帝に謁見することがなかった。

匈奴が入朝して、閼氏（単于の正妻）となる美女を求めた。そこで、帝は、絵にもとづいて、昭君を行かせることにした。出立のときになって、呼び出して会ってみると、その容貌は後宮第一、応対が立派で動作もしとやかであった。帝は後悔したが、すでに名簿が作られていたので、外国との信義を重んじて、いまさら別人に変更することはしなかった。

帝は、どうしてこんなことになったのかと取り調べた。そして、画工はすべて死刑に処して町なかにさらし、巨万にのぼるその家財を没収した。画工のなかには、名のしれた者もいた。杜陵の毛延寿は、肖像を書かせると、美醜老若、実物のとおりに書きわけた。安陵の陳敞、それに新豊の劉白、龔寛は、ともに牛馬や飛鳥のさまざまの姿態を描くのが得意であったが、人物画の出来は毛延寿に及ばなかった。下杜の陽望もまたすぐれた絵を書き、とくに色の使い方が上手であった。樊育も、色の使い方が上手であった。これらの画工も、おなじ日に処刑された。都にいる画工は、それからめっきり少なくなった。（巻二）

注

一　ここに「みずからの容貌を恃んで」の句を挿入するテキストもある。

五侯鯖

五人の諸侯（注二）は仲が良くなかったので、客人も行き来することができなかった。婁護は、弁が立つので、五人の諸侯のあいだを転々と寄食していた。諸侯は、それぞれ彼の歓心を買おうとして、争って珍しい食事でもてなした。婁護は、そこで、それを一緒にして鯖（魚や肉をいっしょに煮こんだ料理）をつくった。これが、いわゆる五侯の鯖で、なかなか珍味であるとされている。（巻二）

注

一　五人の諸侯　前漢の成帝の母舅の王譚（平阿侯）・王根（曲陽侯）・王立（紅陽侯）・王商（成都侯）・王逢時（高平侯）の五人で、同日に諸侯になった。

司馬相如

司馬相如[注一]が卓文君[注二]と一緒に成都に帰って来た当座は、貧乏でその日の暮らしにも困り、文君の着ていた鸕鷀裘という鳥の羽で織った裘をカタにおいて陽昌という商人から酒を掛けで買い、二人で楽しんだ。文君は相如の頸を抱きながら泣いていった。

「わたしはこれまで贅沢三昧で暮らしてきたのに、今では裘をカタに酒を掛け買いするようになったのね」

とうとう二人で相談して、成都の街で居酒屋をひらき、相如は自分で犢鼻褌[三]をはいて器を洗い、文君の父の王孫を恥かしめた。王孫は果たしてそれを気に病み、文君に莫大な財産を分け与えたので、文君は忽ち大金持になった。

文君は非常な美人で、眉の色は遠山を望むが如く、頬のあたりはいつも蓮の花のよう、肌は脂のように柔らかくつるつるしていた。十七のとき寡婦となったが、生まれつき奔放で仇っぽかった。そのため長卿（相如の字）の才子ぶりに惚れて道ならぬ恋に走ったのである。

長卿はかねて消渇（糖尿病）を患っていたが、成都に帰って、文君の色に溺れたため、ついに痼疾となった。そこで『美人の賦』を作り、自分を戒めようとしたが、結局その癖は改まらず、とうとうその病気で死んだ。それを哀しんで書いた文君の祭文は、今日に伝わっている。

（巻二）

注

一　司馬相如　字は長卿、蜀郡成都の人。漢の武帝の時の最も有名な文人。

二　卓文君　蜀の臨邛の富豪卓王孫の娘。司馬相如は卓王孫の屋敷の宴会によばれて行った時、新たに寡婦となって父の家に戻っていた文君を見て、琴をもって挑んだ。文君は夜ひそかに相如のもとに走り、一緒に成都に帰って同棲した。

三　犢鼻褌　ふんどしの類。布で腰の前面を蔽い、後ろにまわして結びとめるようにしたもの。

新豊

太上皇（漢の高祖の父）は、長安に移って宮殿に住まってから、鬱々として楽しまなかった。高祖は、ひそかに、お付きの者にそのわけをたずねた。すると、太上皇が日ごろつきあっていたのは、屠殺人や物売りの若い衆、酒屋や餅子売り、闘鶏や蹴鞠をやる者などばかりで、それがなによりの楽しみであった。ここにはそんな者がひとりもいないのでおもしろくないのだ、ということであった。

そこで、高祖は（太上皇のいままでいた豊邑に似せて）新豊[注]の町を作って、なじみの者たちを移して、そこに住まわせたので、太上皇はたいそう喜んだ。だから、新豊には無頼の徒が多く、子弟の任官する者がいないのである。

高祖は、若いころ、いつも（豊邑の）枌榆にあった社（土地神）にお参りをしていた。新豊への移転にあたって、これもあらためて建てることにした。新豊の町ができあがると、もとの社も移したほどで、道路や家屋の様子は、なにからなにまで豊邑そのままであった。連れ立ってやって来た老幼男女の者たちは、自分の家がすぐわかったし、道路に放された犬・羊・鶏・鴨も、それぞれの入るべき家をさがしあてた。

これを建てたのは棟梁の胡寛であった。移って来た者たちは、そっくりなのを喜んで、だれにもできることではないと思った。そこで、われもわれもと贈り物をはずんだので、一月ばかりのうちに、つもり

つもって百両もの金子になったのであった。　（巻二）

注

一　新豊　豊邑は、漢の高祖の生地で、沛郡に属す。いまの江蘇省豊県。新豊は長安の都の東郊で、いまの陝西省臨潼県。

秋胡

杜陵の秋胡という者は、『尚書』に通暁し、古隷の文字を書くのが上手で、翟公に礼遇された。翟が自分の兄の娘を秋胡にとつがせようとすると、ある人がいった。

「秋胡は、すでに妻をめとっていたのに、礼にそむくことがあって、ついにその妻が水死したのです。そんな男にとつがせてはいけません」

すると馳烏がいった。

「昔、魯の人秋胡は、妻をめとって三月で、仕官しました。三年たってからやめて、郷里に帰りました。その妻が町はずれで桑を摘んでいて、そこを通りかかった秋胡は、それが自分の妻であるとは知らずに、一目見て気に入り、黄金二十両をつかわしました。妻は、『わたしにはお役人になって行ってまだ帰らない夫がおります。わたしは一人の閨を守って今に三年になりますが、今日ほど辱しい目にあったことはありません』といったきり、桑摘みをつづけて振り向きもしなかったのです。秋胡は恥じてその場を立ち去りましたが、家へ着いてから、家人に妻はどこにいるかとたずねますと、町はずれに桑を摘みに行ったまま、まだもどっていない、という返事。やがて帰ったのをみますと、それはさきほど自分が挑んだ女でありました。夫婦は、たがいに恥じ入り、妻は沂の川におもむいて死んだ、といいます。

いまの秋胡は昔の秋胡とはちがいます。昔、魯に二人の曾参がいて、趙に二人の毛遂がいました。南の曾参が人を殺してつかまると、人は、北の曾参の母にそのことを話しました。百姓の毛遂が井戸に落ちて死ぬと、平原君の食客は平原君にそのことを話しました。平原君は、〔自分の食客であった毛遂が死んだと思って〕ああ、天われを滅ぼせり、と嘆息しました。だが、じきにそれが平原君の食客ではなくて、百姓の毛遂であることがわかりました。昔の秋胡が礼にそむいたからといって、どうしていまの秋胡との結婚をやめさせることができましょうか。

この世には、似てはいるが全く実体のちがう物があります。玉のまだ磨きあげてないものを璞といいますが、死んだ鼠のまだ乾かしてないものも璞といいます。月の初めを朔といいますが、車の長柄も朔といいます。名はおなじでも実体がちがうということを、よくわきまえておかなければいけません」　（巻六）

注

一　翟公　翟は姓、公は名。漢の文帝の時、司法官として勢力があった。

二　曾参　孔子の弟子。曾参の母が機を織っている時、「曾参が人を殺した」と知らせる人があった。しかし彼女は自若として機を織りつづけた。二人目の人が同じことを知らせたが、彼女はやはり織りつづけた。しかし三人目の人がまた同じことを告げると、彼女はさすがにこわくなって、杼を投げすて、垣根を越えて逃げたという。

三　毛遂　平原君の食客。平原君のために楚王を説き伏せ、平原君をして「三寸の舌、百万の師よりも強し」と歎ぜしめた弁士。平原君は戦国時代、趙の公子で、食客数千人を養い、斉の孟嘗君と並び称せられた人。

東坡志林

(宋)蘇軾著
松枝茂夫訳

承天寺の夜遊

元豊六年(注一)十月十二日の夜、服をぬいで寝ようとしたが、月影が戸に射しこんできたので、嬉しくなって外を出歩くことにした。しかしとても楽しみを共にするものもあるまいと思い、そのまま承天寺に張懐民をたずねて行った。懐民もまだ寝ていなかったので、一緒に連れだって庭の中を歩いた。庭の中はまるで透明な水をたたえ、その水の中に藻草がゆらいでいるかと思われたが、実はそれは竹柏の影なのであった。

いつの夜だとて月のないことはないし、どこだとて竹柏のないところはない。ただわれら二人のような閑人がいないだけのことである。

(学津討源本　巻一)

注

一　元豊六年　一〇八三年。このとき蘇軾は四十八歳。黄州(今の湖北省黄岡県)にいた。彼は元豊二年、御史台の獄を出て、同三年、黄州に流され、ここに五年間住んだ。

沙湖に遊ぶ

黄州の東南三十里に沙湖というところがある。螺師店ともいう。私はその地に田を買い、その田を見に行って病気にかかった。麻橋に龐安常という人がいて、聾だが上手な医者だと聞いたので、治療を求めて行った。安常は聾だけれども非常に頭がよくて、紙に字を書いて、幾字も書かぬうちにすぐ人の言おうとすることを察するのであった。私はふざけていった。

「私は手を口とするし、君は眼を耳とする。どちらも変わった人間だね」

病気がなおると、彼と一緒に清泉寺に遊んだ。その寺は蘄水県(注一)の郭門外二里ほどのところにあり、王逸少(晋の書家・王羲之)の洗筆泉がある。水は極めて甘い。下は蘭渓に臨み、その水は西に流れている。私は次のような歌を作った。

山下　蘭芽短く　渓に浸り
松間の沙路　浄くして泥無し
蕭々たる暮雨　子規啼く
誰か道う　人生再び少きこと無しと(注二)
君看よ　流水なお能く西す(注三)
白髪を将て黄雞を唱うこと休れ(注四)

この日は大いに飲んで帰った。

(巻一)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com